

1. 現在の日本が為すべき課題

- 「男系男子による安定的な皇位継承の確立」と「国防」

さらに現代における「不平等條約」と言える「国連憲章の敵国條項」の撤廃である。

2. 板垣の著書

- 華族一代論 ●神と人道 ●立國の大本りっこく たいほん (読まれたことありますか?)

3. 板垣にとって「自由」とは手段であって目的ではない。ではその目的とは何か。

板垣の行動の目的は**天壤無窮の御神勅を奉ずるわが皇国の繁栄と永続**にある。

4. 世間に蔓延する相矛盾する2つの板垣像は誰によっていつ誰によって形成されたか

- 戦後に蔓延する板垣像の危うい問題点。(日本を代表する公共放送・記念館が偏向)
- 国会、自民党、日本陸軍の創設。(自由民権運動の原点は何故消されたか)
- 板垣の憲法観…他国の憲法の翻訳ではなく、日本独自の連綿と継承されてきた國體に基づいたものを起草すべしと主張。(植木枝盛の憲法を不採択し北川貞彦が別起草)
- 欧化政策を批判…西欧文明に眩惑され、それを神の如く崇拜し、日本精神を忘却するような者になってはならない。

5. 億兆安撫國威宣揚御宸翰(明治維新の原点における「玉音放送」と同等の価値を持つもの)

- 御宸翰と五箇条御誓文の精神によって展開されたのが自由民権運動である

6. 維新回天の精神【薩土討幕の密約経緯と役割】

- 板垣の少年期より正論を吐いて枉げず、口論、喧嘩が絶えず→惣領職褫奪・土籍を剥奪され神田村に流罪→恩赦→一貫して武力討幕を主張→天狗党(水戸藩筑波拳兵の浪士)を江戸築地の藩邸に独断で匿う。→薩藩と軍事同盟を結び近代式練兵を行うが→藩の方針変更により失脚。「**戦争の結果によって創られた社会構造は再び戦争を起こすことによってしか、これを覆すことができないことは古今東西の歴史が証明している**」と主張。→大政奉還によって平和裏に政権問題を解消しようとする藩庁と対立。過激派と思われて総ての役職を剥奪され失脚した。

●薩土討幕の密約

中岡慎太郎の仲介によって、慶応3年5月21日(1867年6月23日)に京都の小松清廉邸で、薩摩藩の西郷隆盛・吉井友実・小松清廉らと土佐藩の板垣退助・谷干城・毛利恭助・中岡慎太郎らが結んだ武力討幕による回天維新のための密約。「薩土密約」とも。

一、勤王一途に存入、朝命遵奉つかまつ 仕べきる可こと

一、薩土両藩、互いに討幕に向けて藩論を統一させること。

一、両藩は、幕府との決戦に備えて軍備を調達し練兵を行うこと。

一、薩藩が幕府と決戦となれば、土佐藩はその時の藩論の如何にかかわらず、乾退助が盟主となり(藩論が討幕に統一出来ていなかったとしても)、30日以内に必ず土佐藩兵を率いて薩藩に合流する。
(※その為には、集団で脱藩してでも薩藩に合流する)

一、上記は乾退助が切腹の覚悟を以って誓約し、その証として中岡慎太郎が人質となって薩摩藩邸に籠る。(中岡が人質となる事に関しては「それには及ばぬ」との西郷の言を以て除外)

附則として、現在、土佐藩邸に隠匿している水戸藩の勤王派浪士は、時期を見て薩摩藩邸に移管

し、薩藩が責任を持って預かる。というものであった。

●薩土討幕の密約締結後の流れ

薩土討幕の密約が締結された翌日 5 月 22 日(新暦 6 月 24 日)、乾退助はこれを前土佐藩主山内容堂に稟申。薩摩藩側も 5 月 25 日(新暦 6 月 27 日)、薩摩藩邸で重臣会議を開き藩論を武力討幕に統一することを確認した。容堂は薩土密約を承認し、退助に軍制改革を命じた。土佐藩は乾を筆頭として軍制改革・近代式練兵を行うことを決定。藩費でアルミニウム式銃 300 丁を購入。軍制改革・近代式練兵を行った。しかしヶ月後に結ばれた【薩土盟約】によって、大政奉還を行うため寺村左膳らは武力討幕派の退助を迫らし 8 月 21 日(新暦 9 月 18 日)、退助は失脚。ところが 9 月 3 日、京都で赤松小三郎が暗殺されると、薩土盟約は思惑の違いから破綻。9 月 6 日(新暦 10 月 3 日)、薩土盟約の破綻を受け退助が復職。佐々木高行とともに藩庁を動かし、土佐勤王党弾圧で投獄されていた島村寿之助、安岡覚之助ら旧土佐勤王黨員らを釈放させた。これにより、土佐勤王党の幹部らは議して退助を盟主として討幕挙兵の実行を決断。武市瑞山の歿後の勤王党を乾退助が事実上引き継ぐこととなる。しかし 9 月 9 日(1867 年 10 月 6 日)、豊永久左衛門(左行秀)の裏切りによって江戸屋敷に退助が勤皇派浪士を匿い討幕を謀ていることを藩庁に密告され、寺村左膳によって退助は切腹寸前に追い込まれる。勤王党の清岡半四郎は、退助の身を案じ武市瑞山の妻・富子の弟島村寿太郎に退助を脱藩させることを相談。藩庁は取調役として西野彦四郎友保を退助のもとに遣わしたが、退助は「水戸浪士隠匿の件は薩土討幕の密約を容堂公に稟申した際に許可を得ている」と平然と答えた。寺村左膳は俄かに信じなかったが、容堂公の答えは「余は存じておった」というものであった。この時、容堂が発したのが退助を評した著名な言葉「退助は暴激の擧多けれど、毫も邪心なく私事の爲に動かず、群下が假令之を争ふも余(容堂)は彼(退助)を殺すに忍びず(退助は過激な言動が多いが、一つも自分の為におこなっているのではなく、天下国家の事を考えて動いているのだ。それを私は分かっているので、皆が彼を重罰に処そうと進言しても、私は彼を切腹させるつもりは無い)」である。

9 月 14 日(新暦 10 月 11 日)、土佐藩上土勤皇派・小笠原謙吉(牧野群馬の実弟)、別府彦九郎らが、江戸から上洛し、京都藩邸内の土佐藩重役大政奉還派の寺村左膳、後藤象二郎らへ武力討幕を説得。また坂本龍馬も同時期、薩土討幕の密約に呼応してライフル銃 1000 丁を独断で購入し、9 月 24 日(新暦 10 月 21 日)帰藩。藩の参政・渡辺弥久馬(斎藤利行)に対して「乾氏(板垣退助)はいかゞに候や。早々拜顔の上、万情申述度、一刻を争て奉急報候。謹言」と書簡を送り、それより 4 日前の 9 月 20 日には長州の木戸孝允に対して、大政奉還を「大芝居の一件」と自ら評し「小弟(坂本龍馬)思ふに是より(土佐に)かへり乾(板垣)退助に引合置き、夫より上國(京都)に出候て、後藤庄(象)次郎を國にかへすか、又は長崎へ出すかに可仕べきと存申候」とその目的を伝える書簡を送っている。

(参考)薩土盟約 ※「薩土密約」も「薩土盟約」も【薩土同盟】と称される為、混同に注意。坂本龍馬の仲介によって、慶応 3 年 6 月 22 日(1867 年 7 月 23 日)京都の三本木の料亭で、薩摩藩の西郷隆盛・小松清廉・大久保利通らと、土佐藩の後藤象二郎・寺村左膳・真辺正心・福岡孝弟らが結んだ、大政奉還のための盟約。「薩土提携」ともいう。

●再度の失脚

その後、土佐藩は再び大政奉還路線に戻った。藩の重臣会議で最後まで「大政奉還」反対したのは乾退助のみ。この時、退助は「大政奉還とは名は美なるも、その実は空名に過ぎない。徳川三百年の覇政は戦争で勝ち得た秩序である。…であるならば、戦争でできた秩序は、戦争でしか取り返すことが

出来ないということは古今東西の歴史が証明している」と言上するが、この時は容堂は「退助はまた暴論を吐くか」と笑って相手にしなかった。藩論に反対する退助は過激派と見られ失脚した。

●水戸浪士の移管とその後

慶応3年（1867）10月初旬、大政奉還を目前に退助が土佐藩邸に^{かくま}匿っていた水戸筑波の勤王浪士の身柄が薩摩藩へ移管された。この移管は土佐藩が「大政奉還」を進めるにあたって、大政奉還派にとっては不要である過激な浪士を厄介払いする意図があり、武力討幕派にとっては密約の内容を履行し、「彼らの身柄を安全に薩摩藩に移管する」という趣旨に沿ったもので、はからずも両者の利害が一致したために実現したものであった。同10月14日（1867年11月9日）、大政奉還が実現するが、佐幕派の立場から大政奉還を快く思わなかった京都見廻り組によって、11月15日（1867年12月10日）、坂本龍馬、中岡慎太郎らは襲撃され暗殺されてしまう。失脚した退助を残して、土佐藩兵は上洛し京の守りにつくが、12月、小御所会議によって徳川慶喜の辞官納地が決定。慶喜や会津・桑名の幕府側勢力は、二条城から大坂城へと退去し、京都の薩摩・長州勢と武力衝突する事態へと発展してゆく。

●鳥羽伏見の合戦までの流れ

鳥羽伏見の戦いが始まる直前の12月28日（1868年1月22日）、谷干城は西郷隆盛のいる薩摩陣営に呼び出され「まもなく戦が始まる。ついにあの時の約束（薩土討幕の密約）を果たしてもらおう時が来たぞ」と告げられる。京都の土佐藩邸に戻った谷干城は、重臣たちにこれを伝えるが、大政奉還論を進めようとする土佐藩の重臣たちは「片岡健吉を大将として急ぎ土佐藩兵を出陣させよ。乾退助だけは絶対に上京させるな」と指示。やむなく谷干城はこの命令を伝えるため従者森脇唯一を伴い、早馬で土佐へ向った。江戸では土佐藩から移管され薩摩藩の管理下にあった水戸浪士らが幕府を挑発。江戸では、幕府側についた庄内藩が、薩摩藩邸に報復して放火するという「江戸薩摩藩邸 焼き討ち事件」が発生。瀧川播磨守が『討薩表』を持って上京し、鳥羽伏見で両軍が武力衝突することとなった。

●板垣退助の復職と進軍

慶応4年1月3日（1868年1月27日）、鳥羽伏見の戦いが勃発。翌4日、在京の退助派の土佐藩士・山田喜久馬の率いる第一別撰隊をはじめ、吉松速之助、山地元治、北村重頼、二川元助らの各部隊が「薩土討幕の密約」を履行して参戦した。谷干城は1月6日（1868年1月30日）、ようやく土佐に帰りつき、国許に京の情勢と出兵の命を伝えた。「乾退助だけは絶対に上京させるな」と京の藩邸からの指示であったが、退助が出ないと戦は勝てない。このねじれを解決させるため、国許の藩士は土佐におられる豊範公が藩主で、容堂公は隠居した前藩主に過ぎないとして、京邸の指令を反故にし、即日退助の失脚を解き、藩兵の大隊司令に復職させ東征の途につかせた。

●甲州勝沼、日光、会津を攻略

●西郷隆盛の板垣評

戊辰戦争後の論功行賞の席で、退助と西郷隆盛が再会した時、西郷は「板垣さんは怖いおひとよ。あんな物騒な浪士を薩摩藩にかつぎ込んで大戦争をおっぱじめさせるとは…」と^{とぼ}慌けて見せた。また、西郷は板垣を評して「板垣さんは失脚した中から、この大戦争を^{じやつき}惹起し、大功を立てられた。天晴と云うほかない。戊辰の役に死したるもの少なからざれど、^{あっぱれ}之が爲に生を得たるものは唯一人、君（退助）のみ」と。明治六年の征韓論争の頃、有馬藤太が西郷隆盛に「今、二十万の兵（へい）を授けて海外に派し、^よ能く国威を^{はつよう}発揚し得る者は誰か」と尋ねた所、西郷は即座に「それは板垣の他にはおらぬ」と答えた。これは『維新史の片鱗』という回顧録に記されている。

●蝦夷地がプロイセンへ売却されるのを阻止した板垣の功績

戊辰戦争の当時、江戸から指示を出していた大村益次郎は「**枝を刈って幹を枯らせ**」これは「会津に組みする周辺の藩を先に攻略し会津を孤立させてから攻略せよ」との意味であった。会津攻めの総大将であった板垣退助は『ナポレオン戦記』を読んでいたので「フランスは強国なれど、しばしば雪山に負けを知ると聞く。我等南国（土佐・薩摩）の兵たれば、雪国の冬の来たれる迄にこれを討たむ」と早期決戦を立案。薩藩の伊地知正治と合議して大村に「**幹を断てば枝も自と枯れる**」と伝令を返して激流の阿武隈川を渡り、母成峠を越え、十六橋を渡り、急ぎに急ぎ馳突して会津城下に入った。慶應4年（1868）7月、会津、庄内の両藩は戦費調達のため、北海道をプロイセン（現・ドイツ）に売却した。契約文書では『99年間貸借条約』となっているが、当時の契約文書の語法として事実上の売却を意味していたとされる。プロイセン宰相ビスマルクは、初めは局外中立を保って一度は拒否したが、3週間後に考えを改め「承諾書」を送った。横浜にいた駐日プロイセン公使マックス・フォン・ブラントが書いた外交書簡によれば、貸与期間は具体的に「ヘンリー・シュネル（当時東北にいたプロイセン人の仲介役で日本名・平松武兵衛）が、借入れに対して蝦夷地の領地を九十九年間、担保として与えるとする会津藩主・庄内藩主の全権委任状を持ってきた。百平方ドイツマイル（五、六二五平方キロメートル）の土地を得るのに三十万メキシコ・ドルで充分であろう」と記されている。

（『駐日公使発本国向け外交書簡』ベルリン連邦文書館蔵）プロイセンからの返書が日本に届いたのは、会津が落城して1週間後のことであったため、有耶無耶となったが、板垣が早期決戦を挑まず、会津戦争が長期戦となっていたならば、北海道の広範囲はドイツ領となっていた可能性がある。

●ガルトネル開墾条約事件（補足）

榎本武揚が率いる蝦夷共和国が10月末に箱館を占領し明治2年2月19日（1869年3月31日）に「蝦夷地七重村開墾条約書」を無断で締結した。その内容は、七重村およびその近傍の約300万坪を99年間租借するというものであったが1週間後の18日には榎本の降伏により蝦夷共和国は倒れた。しかし条約が1週間履行されてしまった為、この土地を足掛かりに蝦夷地が植民地化されるおそれもあることから、明治政府は外務省は11月、ガルトネル条約の契約を破棄するよう伝えたが難航し、明治3年（1870年）11月、明治政府が62,500両の違約金を支払うことでようやく契約を解消した。

●官軍が遺体埋葬を禁止したという虚偽の流布について

「戊辰戦争で戦死した会津藩士の遺体が半年間、野ざらしにされた」という伝説をまことしやかに語る人がいる。2016年12月に会津若松市で発見された『戦死屍取仕末金銭入用帳』新政府は会津藩降伏の10日後の旧暦10月2日に埋葬を命令しており、翌日10月3日から同17日にかけて、会津藩士4人が指揮し、鶴ヶ城郭内外などにあった567体の遺体を発見場所周辺の寺や墓など市内64カ所に集めて埋葬した。埋葬経費は74両（現在の約450万円）、のべ384人が動員され、1人当たり1日2朱（同7500円）が支給されたこと。発見当時の服装や遺体の状態などが克明に記されており。

禁止令はフィクションであることが確定している。

7.板垣の遺した言葉

●日本は侵略国家にあらず ●社会主義の脅威 ●欧米の心術プロパガンダに惑わされるな

8.結語

●『板垣死すとも自由は死せず』という言葉が著名ではありますが、その一言だけでは語り盡せない真の【板垣像・板垣精神】を知って頂ければと考えております。